

冬季に伐採したシイタケ原木の取扱い

シイタケ原木の伐採適期は、秋に樹木が休眠期に入る黄葉初期といわれ、このような時期に伐採して春先の植菌までに乾燥枯死の進んだ原木にはシイタケ菌糸のまん延は良いが、冬期伐採の生木状態のものではシイタケ菌糸のまん延が悪いことが、当所の試験でも認められている。(本誌No.42参照)しかし本県の場合、購入原木が過半を占めており、これらの原木はほとんど冬季に伐採したものであるため、生木状態で植菌されているのが実態である。

シイタケ菌糸が原木という栄養源に伸びるためには、主として、温度、水分・材の枯死等の状態が大きく影響する。しかし本県のような積雪寒冷地では、冬季に伐採した原木は凍結状態にあることから、春先の植菌適期までに乾燥枯死を進めることは難しい。このため植菌時期を遅らせ、そ

ことは難しい。このため植菌時期を遅らせ、それまでに原木の乾燥枯死を進めてから植菌すればどうかということが問題となり、講習会等でよく質問される。

そこで、冬季2月に伐採し玉切った原木を使い、3月下旬に1本当たり3か所の植菌を行なったものと、横積みまたは井ゲタ積みにしておいた原木に、5月下旬と6月中旬に同様の植菌をしてみた。

その結果は図のとおり、3月下旬に植菌したものは、原木の組織が活着しているためシイタケ菌糸の伸長が一時停滞し、種菌の周囲にできる環状の変色(菌環)が植菌駒数の90%と多く、生木状態であったことがわかる。これに対し5月下旬に植菌したものは、横積みで15%、これよりも乾く井ゲタ積みのものと、6月中旬に植菌したものは菌環の形成が皆無であった。これにより植菌時期を遅らせるほど原木の枯死は進むことが明らかである。

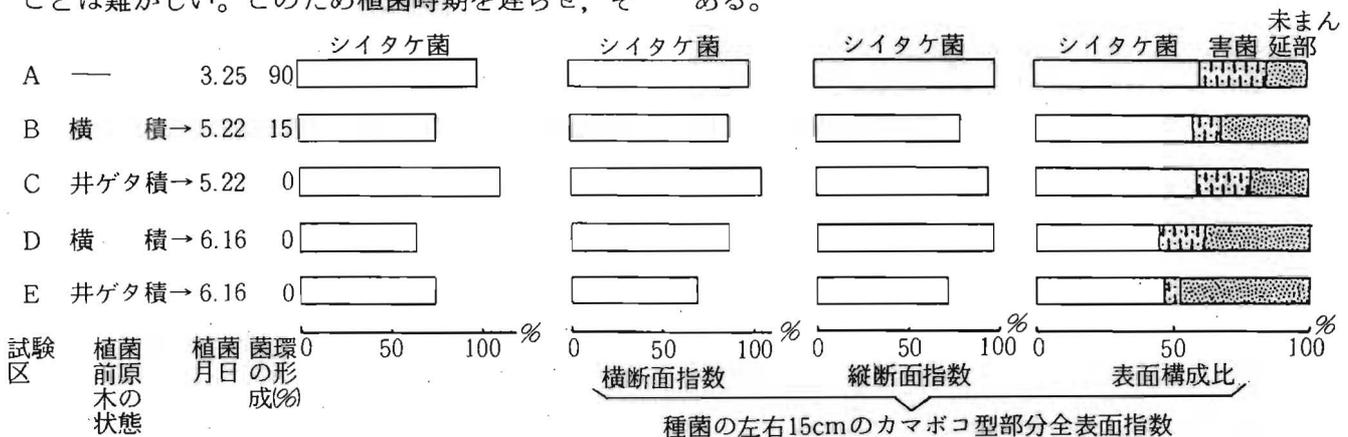


図-1. 植菌前原木の状態と中央種菌1個当り菌糸まん延状況

次にこのような原木に対し秋までのシイタケ菌糸の伸長状況をみると、植菌までの原木の積み方によっても若干の違いはあるが、概して、原木の枯死は進んでも植菌時期が遅いほどシイタケ菌糸のまん延は表面・材内部ともに悪くなる。

一方シイタケ菌糸の伸長因子である温度について、植菌から秋までの菌糸伸長積算温度をみると、3月下旬植菌を100とした場合、5月下旬植菌は57、6月中旬植菌は75となり、当然のことながら植菌時期の早いものほど積算温度は多くなる。

以上のことから、原木の枯死も大切だが、これと同じように積算温度もほだ化に大きく影響することがわかる。したがって、冬季伐採の生原木は、乾燥枯死を進めるために植菌時期を遅らせると、害菌防止の面や、労力確保の面等から好ましくな

いので、たとえ生原木であっても積算温度を確保するため、早期(3月下旬まで)に植菌し、仮伏せを経て、本伏せ段階で原木の枯死をはかるような管理が必要となる。

なお図にみられるように生原木に害菌の多いのは、主として仮伏せ中の植菌原木周辺の湿度が高かったためと思われる。実際の栽培では植菌数が6倍くらい多いので余り問題にはならない。しかしシイタケ菌糸の量は熟度に関係するのでこの点を重視したい。原木の伐採は秋の適期に行い、気温の低い時期に乾燥枯死をはかり、初春の適期までに植菌するのが原則である点を、ここで再確認したい。

(経営部 斉藤)